

戦後日本のコンペに見る建築家の建築計画・設計理念とその手法に関する研究 その1) 広島平和記念聖堂のコンペの場合—入賞案と建築家

正会員 ○李 明 1*
正会員 石丸紀興 2**

戦後建築 1 コンペ 2 建築家 3
設計理念 4 手法 5 広島平和記念聖堂 6

1. はじめに

本研究は、諸文献と調査を通じて、戦後の日本において行われた都市建築コンペにおける建築家達の設計手法とその理念について考察することにより、戦後日本都市建築の動向を明らかにしようとするものである。本稿ではその一端として、昭和23年に行われた広島世界平和記念聖堂（以下記念聖堂と略す場合ある）のコンペを取上げ、諸文献と調査を通じて、コンペの募集規定要項について考察すると共に、入賞案とその建築家を整理して示すことを試みる。

衆知のように、記念聖堂のコンペは、戦後日本の建築競技において大きな話題を残している¹⁾。特に2等入賞の丹下健三の案については議論されているものの、しかし、そのコンペの全般を視野に入れた言及はほとんどない。今回、広島世界平和記念聖堂コンペについて調査を行い、当時のコンペ入賞案や図面などが明らかになった。

2. 記念聖堂の建設とコンペの企画過程

広島カトリック教会を代表して、記念聖堂の建設に当たられたのはラサール神父²⁾である。記念聖堂を建設するに際して、ラサール神父は、その設計をコンペによって進めようとした。なぜコンペ方式を採用することになったかについて、一つのエピソードが伝承されている。それは、当時朝日新聞社広島支局にいた社会部担当記者の江藤文比古が、広島の建築家と親交があって、建築に深い理解を示し、その江藤がラサール神父にコンペを勧めたというのである。朝日新聞社が記念聖堂のコンペの後援をし、審査員にも名を連ねていることも、このような経緯から理解できる。しかし、ラサール神父はコンペを実施しようにも、手掛りがあったわけではない。そこで当時の早稲田大学教授で建築家の今井兼次を訪ね、相談して最終的にコンペ方式を決定したという。ラサール神父は、今井兼次のところへ行った時のことを後に回想して、「今井先生、当時、早稲田大学で建築教えたんですね。それで相談してコンペティションにしました」と述べている。今井兼次は、やはりカトリック信者であり早稲田大学のカトリック研究会の顧問もしていて、上智大学とはつながりがあったのである。今井は、後に記念聖堂のコンペの経過について語る際、その要項が、1948年3月28日、すなわち復活祭の大祝日に発表されたことに触れ、「私は教会側の助言者として約一ヶ月半このかた募集規定要項の骨子を整理し尚審査員の推挙に就いても凡てを依頼せられたので審査員の入選には

これに適当と思う方々を推挙した。」と述べている³⁾。これによって、1948年2月初旬から要項づくりを進めたことと、事実上、今井兼次が本コンペの企画において指導的役割を果たしたことがわかる。

3. 記念聖堂コンペ募集規定要項

以上のように、記念聖堂の建設はラサール神父によって計画され、コンペは今井兼次によって企画されたのである。そして応募者に対しては、「平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計募集規定要項」が用意された。ここで、コンペの基本的項目についてまとめると表1のようになる。

表1 広島世界平和記念聖堂コンペ募集規定要項

項目	内容
募集の主旨	世界平和の礎にその生命を捧げた人々を記念する為、その聖堂建築を計画した。本計画においては優れた日本的性格を発揮すると共に戦後日本の新しい時代に応ずる提案を望んでいる。①聖堂の様式は日本的性格を尊重し、最も健全な意味でのモダン・スタイルであること、従って日本及び海外の純粋な古典的様式を避けるべきである。②聖堂の外観及び内部は共に必ず宗教的印象を興えなければならぬ。③聖堂は記念建築としての壮麗性を持つものでなければならぬ。以上のモダン、日本的、宗教的、記念的という要求を諷刺させることがこのコンペの着眼である。
設計対象と範囲	指定なし
賞金	1等10万円1名、2等5万円2名、3等2万円3名、佳作5千円6名。
審査員	①イエズス会建築家グロツパ・イグナチオ、②建築家東京大学講師堀口捨巳、③建築家早稲田大学教授今井兼治、④イエズス会日本管区長ウーゴ・ラサール、⑤建築家野村藤吾、⑥カトリック広島教区長萩原晃、⑦建築家日本大学教授吉田鉄郎、⑧朝日新聞社代表
応募者資格	日本人に限る。
応募締切	昭和23年6月10日正午。
その他	懸賞募集規定、設計心得など。

注:表1は「平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計募集規定要項」(昭和24年6月東京新宿街社発刊)に基づいて作成した。

要項には、主催者は当然のことながら、広島カトリック教会であり、その代表者として「同教会主管者フーゴ・ラサール」と記されている。後援として朝日新聞社の名が載っている。審査員は、ABC順として、イエズス会建築家グロツパ・イグナチオ、建築家東京大学講師堀口捨巳、建築家早稲田大学教授今井兼治、イエズス会日本管区長ウーゴ・ラサール、建築家野村藤吾、カトリック広島教区長萩原晃、建築家日本大学教授吉田鉄郎、朝日新聞社代表、の8名となっている。グロツパ修道士は、幟町教会において戦前に建てられた司祭館をはじめ、長束の修道院、三條の修道院の建物の設

The research related to the building plan and the design ideology and the technique of the architect in the competition of Japanese city building in the ages after the war

The case of the competition of Hiroshima peace commemoration temple.

Li ming 1

Norioki ISHIMARU 2

計も手掛けており、広島との関係は強かった。なお、今井兼次の紹介により村野藤吾が審査員として依頼された。堀口捨巳や吉田鉄郎も今井の紹介によったと考えてよからう。

コンペの主旨としては、「本計画においては優れた日本の性格を発揮すると共に戦後日本の新しい時代に応ずる提案を望んでいる。」となっており、また聖堂の様式は日本の性格を尊重し、最も健全な意味でのモダン・スタイルであること、従って日本及び海外の純粋な古典的様式は避けるべきであること、聖堂の外観及び内部は共に必ず宗教的印象を興えなければならないこと、聖堂は記念建築としての壮厳性を持つものでなければならないこととなっている。以上のように、モダンの、日本的、宗教的、記念的という要求を調和させることがこのコンペの主眼であった。

4. 入賞案と建築家

以上によって、記念聖堂のコンペは戦後日本の最初のコンペとして実施された。戦後の日本の建築界において、コンペは、新たな建築設計の方法として、歓迎された。銀座や渋谷、池袋など、東京の復興計画がコンペとして募集され、建築家たちが意気込んで参加したのである。また、同じ広島地で、平和記念公園のコンペが、翌年の1949年に実施された。当時、実際の建築設計の業務が少ないこともあって、また終戦までの建築に対する考え方を清算し、あるいは、それまでに蓄積していた建築へのエネルギーを解放しようともいうかのように、コンペは建築家たちに歓迎されたのであろう。

1948年6月10日正午に、コンペの募集が締め切られ、応募総数は177点であった。同年3月28日募集規定要項の発表から、2ヶ月余という短い設計期間しかなかったにもかかわらず、これだけ多数の応募があったことは、驚くべきである。確かに、建築家達は、このコンペに参加することによって、新しい時代の到来を実感しようとしたに違いない。

コンペの審査は、上智大学の講堂でなされたといわれ、審査風景の写真が残っている。審査の過程では、相当な議論があったと伝えられているが、1948年6月30日には、朝日新聞の紙上に、コンペの審査結果が発表された。紙面に掲載されたパースは、井上案であった。審査結果をまとめて表2に示す。表2のように1等がなく、3等、佳作を募集要項よりも多く選んで、かつ準佳作を加えていることに注目しなければならない。当初賞金として提示された全額が入賞者と佳作者、準佳作者に配分された。特に、1等案が選出されなかったこと、あるいは1等に該当する案が存在しないとされたことは、この記念聖堂のコンペに多くの議論を巻き起こし、またその後の設計に複雑な問題を残した。

なぜ、1等案が選出されなかったのであろうか。審査後に発表された「教会代表者の感想」によれば、「多くの設計にモダンと記念的性格が顕著に具現されていても宗教的と日本的と云う点が非常に弱い表現に終わった・・・」と述べ⁴⁾、応募案が建物の宗教的性格と日本的性格の表現において充分でなかったことをあげている。特に2等案と3等の前川案を

代表させて評論することによって、1等案を選出しなかった理由に替えているように思えるが、その詳細は明らかになっていない。

表2 入賞案と建築家のリスト

入賞等級	建築家	所属	地域
1等なし			
2等(2点)	井上一典		神奈川
	丹下健三	東京大学	東京
3等(4点)	衛藤右三郎		鹿児島
	菊竹清訓	早稲田大学学生	東京
	前川国男	前川建築事務所	東京
	米澤迪雄		東京
佳作(8点)	柴木一成		大阪
	内田祥哉		東京
	大江 透		東京
	小坂秀雄		東京
	高田秀三		東京
	道明栄次		東京
	福田良一		東京
	野生司義章		東京
準佳作(20点)	荒井龍三		東京
	大塚常雄		東京
	大澤 浩		東京
	小川正男		大阪
	河内義就	晝設計事務所	広島
	佐藤秀三		東京
	笹原貞彦		東京
	杉本朝次		東京
	鈴木久彌		東京
	竹崎文二		東京
	徳永正三		京都
	富田信一		東京
	七海 資		大阪
	福富 弘		東京
	福永満八		神奈川
	村上 潤		神奈川
	山口文象		東京
山根正次郎		大阪	
吉原慎一郎		神奈川	
渡部安吉		東京	

注：表2は「平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集」(昭和24年6月東京新宿共済社発行)と昭和23年6月30日付朝日新聞を参照して作成した。

5. 結び

コンペの結果、1等が選出されなかったことは、様々な問題を巻き起こした。しかし、教会側や審査員の評論には2等の井上案、丹下案と3等の前川案について高く評しているものの、様々な異なる意見があったことは事実である。果たして、どうなのだろうか。今度、この3点の案について平面計画、デザイン特徴等の面から具体的な比較検討を試みたい。

注釈：

- 1) コンペの結果は建築界、建築学会等で相当な議論が行われた。日本建築学会発行の『建築雑誌』(第742号、1948年7月)において、岸田日出刀が「一等必選」を発表したことから火がついた。記念聖堂のコンペの結果を報じたのは1948年8月号であったが、岸田は早期に執筆したのであった。
- 2) 1948年10月25日、日本へ帰化。宮内省神官となる。それまではフーゴ・ラサール神父。当時上智大学に属し、秋川神甫宮主。
- 3) 今井兼次「審査所感」(『建築雑誌』第63巻743号、1948年8月)49頁。
- 4) 「平和記念広島カトリック聖堂建築競技設計図集」(昭和24年6月東京新宿共済社発行)による。